
軽音部の日常

はわわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軽音部の日常

【著者名】

はわわ

【あらすじ】

今年、桜ヶ丘高等学校の一年生になった櫻木晴樹は、いつものよ
うに、学校生活を送る…

第一話

俺は、まどろみの世界から帰還した。

「寝ちつたのか…」

自分が寝ていたのがアパートの血室のベッドではなくデスクに突っ伏して寝ていたことからパソコンを操作しながら眠ってしまったことが分かる。

ふとディスプレイに映る時計に目をやると、7：02と表示されていた。

部屋の窓をガラリと開けると、朝日が部屋の中に射し込む、外を見るといつものように近所のお婆さんが簫で地面を掃き掃除していた。通勤中のサラリーマンが道を歩っている。

「んっ？」

そんないつもの風景とは違った異彩を放つ人物を目撃した。

その人物は、真新しい制服（スカートなので女の子だと思われる）を身にまとい、寝癖の付いた髪を揺らしながら、食パンを口にくわえ、けして速いとは言えない速度で走っている。

「おはよう。」

「はあ、はあ、おはよー」

その女の子は、お婆ちゃんと挨拶を交わし走つていった。

制服からして、俺が通つとの同じ桜ヶ丘高校の制服だが

「何故に、あんなに急いでるんだ? まだ、7時だぞ、学校は、8時登校のはず…」

考へてもしょうがないと思つて、とりあえず台所に向かへ。

さつきの女の子は、見ない顔だったが、なかなかの美少女だったな、
そういえば今日は、入学式だ、だとするとおそらくあの子は、新入
生か…

そんなことを思いながら、冷蔵庫を開けると。

「なつ…」

冷蔵庫の中には、朝食になるようなものが何一つ存在していなかつ
た。

「とつあえず「ハハビ」行くか

俺は制服に着替えて鞄とギターケースを手に取り部屋を出た。

『二ひつしゃいませ』

コンビニに入るとよく見知った人物を発見したその人物は、なにやら雑誌を立ち読みしている。

「美希さんおはよう」さこます。

「あら、ハル君、おはよう。」

この人は、七瀬美希さん、俺のひとつ上の先輩で三年生だ、艶やかな長い少し茶色をおびた髪とインテリ感をかもし出す黒ぶち眼鏡が特徴的だ。

「ハル君今日は、登校して来るのが早いけど、どうしたの？」

雑誌をガサガサと棚に戻しながら美希さんは聞いてきた。

「いや、実際に食料がなくて、とつあえずコンビニで何かしら食料をと思います。」

「ふーん、ハル君の家には、食べ物がなくていつもコンビニに頼つてだらしない生活を送っているとそして、食生活が偏り栄養バランスも崩壊、よつてハル君の身体は……」

「ちょっと、美希さんっー今日またまたまですつてー。」

聞かれたから答えただけなの『えりこ』となってしまった。

「ふふつ、『冗談よ。』

そういつて美希さんは、いたずつぽい笑みを浮かべた。

「それに、ハル君が本当にそんな生活してるとは思つてないわ、仮にもし、

「そうだつたら」飯でも作りに行くんだけどなあ。」

「本当ですかー。」

「それも、『冗談よ。』

「ぐおおおおおお…」

俺が、声にならない叫びを放つていると、美希さんは、じゃあねとヒリヒリと手を振りコンビニを出て行ってしまった。

「ひづりーひづりー、みんな、登校してくれないらしい。」

「まあ、朝から、美女に会えただけでも良しとするか。」

俺は、買い物を済ませ、コンビニを出た。

コンビニを出た俺は学校に向かうべく歩んでいた。すると、道の途中で何だかキョロキョロとしている女の子がいた。

「あのー」

「はい？」

「何か、お探しで グハツ すか。」

振り返つてこちらをみた女の子があまりにも美少女だったので、一瞬たじろいでしまった。

「あの、桜ヶ丘高等学校といつといひに行きたいのですが…」

「えっ、桜校になら俺もこま向かつてるところだから、一緒にいく？」

「そうなんですかあ、助かりました、では一緒でいい？」

俺とその美少女は、並んで学校への道を歩く。

「真新しい制服からして今日、入学する新入生つうとうかな？」

「やうなんです、でも入試のときは、車で来ていたもので、道が分からなくなつて。ありがとうございます、本当に助かりました。」

「いやいや、礼には及ばないよ。あ、名前、言つてなかつたな。俺は、櫻木 晴樹、よろしく。」

「よろしくお願いします、櫻木さん。私は、琴吹 紗、といいます。」

「よろしく紹介します。」

そんな会話をしながら、一人は、校門をくぐった。

入学式が終わり、下校するだけとなつた今、美希さんから用があるので部室に来てとのメールがきた。

俺が所属している部活は軽音部だ、と言つても今は去年までいた先輩達が卒業してしまつたから、俺と美希さんの二人だけが部員だ。二人だけということで先輩達が卒業してから今まで、実質活動はしていなかつた。

まあ、たまに一人で部室で駄弁つたり勉強したりすることはよくあつた。

部室の扉のドアノブに手をかけ扉を開く。

部室に入ると、美希さんが窓から外を見ていた、ボーッとしているようにも見えるが何だか悲しそうな顔にも見える微妙な表情をしている。

「あっ、あの美希さん？」

「…あら、ハル君来てたの。」

「もしかして、俺が来るの遅いから寂しかつたんですか？」

「ふふつ、ちよつと考え事していただけよ。」

美希さんはそつまつと、椅子に座る。

「そういえば、用つてなんですか？」

俺は、食器棚にある湯飲みを2つ取りだし、番茶を淹れる。

「ああ、新入部員の獲得の作戦会議よ。」

「勧誘しないと、いけないですしね。」

「まあ、そつまつ」と、新入部員獲得しないには何も始まらないわ。

「

「お茶どうぞ。」

「ありがとう、ハル君は何かいい作あるかしら？」

そして、俺は美希さんの向かい側に座る。

「ビラを配るのは、ビリの部もやつてますから…ビラに『今入部する』と美少女がもれなくついてくるー。』と書くとか。」

「却下。」

一刀両断されてしまった。
俺だったら、即入部するんだけどな。

「ハル君、他にはないの？」

美希さんが若干呆れながらさらに意見を求めてくる。

「他、ですか。……んー美しょ」

「美少女が、なんたらとかは、もうやめてね。」

「ん…………」

そして、暫く考えてみる。

「美希さん……」

「なに、ハル君？」

「思い付かないです……」

俺の脳は、美少女関連じゃなくなつたとたん全く働かなかつた。俺の思考能力のいたしかたに悲しくなつてきましたぜ。

「さすがね、ハル君。まあ最初から期待してなかつたわ。」

「ガーン」

「それに、エリは、もう一年生全員に配つたわ。」

「一体、どうやって一年生全員に配つたのかは凄く謎だが、あえてツッ「まなこでおひげ」

「じゃあ、この会議、意味ないじゃないですか！？」

「そうよ、ただハル君をいじりたかつただけ。」

美希さんは、とんだペテン師だった。

第一話（後書き）

なるべく早く更新したいです。
まだ一話目ですが、感想とかいただけたら嬉しいです。

第一話

美希さんによる、意味のない作戦会議が行われてから一週がたった日。放課後。

『新入部員が入つたら連絡するわ。』

と言つた美希さんからは、全く連絡が来ない。もしかして誰も入部してこないのだろうか。だとしたら、部員数が足りず軽音部は廃部になつてしまふだろう。

やつぱりビラ配りだけじゃダメだつたか…

そんなことを思つていると、あることを思い出す。

「そういや、ギター…」

入学式の日に部室に置いてつたきり忘れていたことに気がつく。ここ一週間、いくらバイトが立て込んでいたからって大事なギターを一週間も放置は流石にまずい。

ちなみに俺は、アパートで一人暮らしをしているので生活費稼ぎにバイトをしていたりするのだ。

「もしかしたら、新入部員が来ているかもしねーし。』

とこつわけで、部室に向かう。

部室に入った俺は、驚愕する。
そこには、椅子に座る美希さんと新入部員らしき二人がいる光景。
俺の存在に気付いた美希さんがこちらを見る。

「あら、ハル君やつと来たわね。」

「…ひ」

「ひ？」

俺は、若干涙目で全てをぶつける。

「ひどいじゃないですか！俺、新入部員来るの楽しみにしてたのに

「…自己紹介イベントとか、いち早くやりたかったんですよ…それに『部員入ったら連絡するわ』ってのは、なんだつたんですか！…言ってくれればバイトの時間とか、やりくりして来たものを！何で連絡くれなかつたんですかあ…」

「直感だつたわ。」

「自分で言つたん、でしようがあああつ！」

美希さんは、ペテン師どもの騒ぎじやなかつた。

「まあまあ、そつ騒がないの、ほらハル君が来て早々叫び出すから三人ともドン引きしてゐるぢやない。」

「うへ、」

そつ言われて、俺は初めて三人が俺を見て引いてる事に気づく。てか、三人の中の一人がよほど驚いたのか、氣絶していらっしゃる。美希さんが、パンパンと手をはたく。

「じゃあ、自己紹介イベントやつまじょうか。」

「おーい、澪ー」

「うひひ。」

一人が、気絶した子を帰還させる。

「よつしゃあつー。」

やつと来た自己紹介イベント、遅れたとはいえ、テンションが上がるのが俺なのだ。

三人とも椅子から立ち上がりカチューシャの子が一步前に出る。

「私は、田井な」

「田井中律さん！」、秋山澪さん、それに琴吹紬さんだよね。俺は、櫻木晴樹、よろしく！」

「へつ？」

三人同時に、ポカンとする。

そして、紬ちゃんが疑問を投げ掛ける。

「私は入学式のときに会いましたが、どうして、一人の事知つてるんですか？」

「そうですよー私と澪は会つたことないですよ。」

「そつ、そつですつー。」

「俺、桜校の美少女の名前だつたら全員頭に入つてるんだ。一年生はまだうる覚えで完全じやないけど。いやー今年の一年生女子は皆、美少女で素晴らしいー！」

「「「え…」」」

えつ、なにこの空氣、三人とも俺を非難の目で見ている。俺、なんか変なこと言つたか？

「ハル君、自らの手で自己紹介イベント消滅したわね。」

「えつ、俺は普通に自己紹介を…あ

俺は、盛大にやつちまつた事に気づく。

確かに、テンションが上がつた俺は余計なことをベラベラとしゃべつてしまつた、くそつ、なにやつてんだ俺は！もうちょっとと考えてから話せよ俺！俺はバカなんですか？バカなんだな？バカなんだよ…！

もうだめだ、今俺が居るのは、部室？学校？公共の場？そんなこたあ関係ねえ！！

Let's shout!!

「やつちまつたあああああああつ…！」

そして、ザワザワしだす美少女たち。

「あの、櫻木先輩が凄い事になつてるんですが大丈夫なんですか？」

「ムギが、最初に会つたときも『んなだつたのか？』

「私が初めて会つた時はあんな感じじゃなかつたよ」

「心配無用よ、ハル君はいつも、こんな感じで叫んでるわ。安心して。」

「「「そうなんですか…」」

「いや、違つわつー」

俺は、慌てて美希さんに反論する。てか、それで安心されたまるか。

「現に今、叫んでるじゃない。」

「でも、それは今だけですつー。」

「うるさいわね。シッシッ」

そう言つて美希さんは、手で払つ動作をする。何かひどい扱いだ。涙が溢れてくるぜ。

「俺は「ミか何かですかあああつづ…うわああんづ！」

「なーんか、怒つたり、叫んだり、泣いたり忙しい先輩だなー。」

「感情が豊かといつか…」

「面白い人だわあ～」

「「えつ…？」」

そんな俺を見て、新入部員三人集が話している。
何か、三人に与えた俺に対しての印象が変な感じに…
ここは何とかしないと後々大変なことになるのではないか？これは
やばい。

「み、美希さん、これでやつと部活できますね。はははヨカッタ、
ヨカッタ。」

俺は、このままではまずいので、平静を装つが…

「どうしたのハル君、急に泣き止んだわね…」

美希さんは、俺の豹変ぶりに疑問を持つ。

「あ、そういうこと。このままじゃハル君変な子のままだものね。」

美希さんは、そう言いつとつんうんと頷きながら読書を始めた。どうやらもう俺を弄ぶのに飽きたとみた。

てか、一瞬で気付かれてしまった。

まあ、いきなり泣き止んだりしたら、そりゃあ疑問ぐらい誰だつて持つだろ？

だがしかし！ここまで他人の思考を読めるのだろうか、俺はそんなに分かりやすいか！？どうだい？…誰に聞いてんだ俺は。

とりあえず、美希さんの魔の手から逃れたわけだ、新入部員と親睦を深めるとするか。

「さあ、三人とも座つて座つて。」

俺は、三人を椅子に座るよう促す。

すると、三人はさつきまで座っていた席につく。

俺は空いている席につく。

「三人はいつも入部したの？」

「私と澪は、入学式の次の日です。」

「私は、一人が入部した次の日です。」

「なんか入学式の次の日とその次の日か…結構早く入部してたんだ

…」

ところによると、美希さんは『入部してたら連絡するわ』と言つたのが一日で盲点になつた。…絶対わざとだな。

「櫻木先輩は、なんの楽器やつてるんですか？」

律ちゃんが聞いてくる。

「俺はギターやってるぜ。ほら、あそこにあるやつ。」

俺は部室の隅っこに立て掛けたギターケースを指差す。

「あれ先輩のだつたんですか。美希先輩に聞いたときは、『あれは誰のものでもないわ…持ち主は、もう居ないわ…』って言つてたら何なのかなと思ってましたよ。何かホントっぽかっただし…」

「そつ…そうなんだ。」

俺は流石に一週間も忘れていたとは言えず曖昧な返事をする。ふと、美希さんを見ると、美希さんは見知らぬ高級そうなティーカップで紅茶を飲んでいるのが目につく。

「美希さん、そのティーカップどうしたんですか？」

読書していた美希さんは、本へと向けていた目線をじりじりと向けてくる。

「ああ、これはムギちゃんが持つてきてくれたのよ。後、紅茶もね。

」

「へー紬ちゃんが。」

「はい、家に沢山あつたものをすこし持つてきたんですよ。」

見渡すと、美希さん以外の三人もティーカップを使っている。てか、こんな高そうなものが家に沢山あるものだろうか、いつたいどんな家に住んでいいのだろうか。

二口二口していた紬ちゃんは、いきなりハツとした様子でこちらを見てきた。

「あつ、先輩にもお茶淹れますね。」

「あつ、俺は。」

お茶なら、自分で淹れるからと言おうとしたがそこでやめる。何故なら、紬ちゃんは、とても楽しそうにお茶を淹れに行つたからだ。それには、止め難いものがあった。

紬ちゃんが席をたつた事によって、澪ちゃんと田代が会った。チャンスとばかりにイケメンフェイスを作り、歯をキラーンとするが…瞬時に目を逸らされてしまった。…ショックだ。え、なに、嫌われてんのかな俺。

いや、初対面だから緊張してるんだな、可愛いヤツめ。そんなことを思つて澪ちゃんをジロジロ見つけると、律ちゃんが手招きをしてきた、

「（先輩ちょっと、ちょっと。）」

子声で言つてくる。
律ちゃんが机に身をのりだし、机の上に近づく。いつも身をのりだして耳を貸す。

「（澪は、人見知りなんで初対面の人の前だとあんな感じで。）」

澪ちゃんを見てみる。

俺の視線気付くと無表情のまま固まつた。

「（人見知りつであんな感じになるか？普通。）」

「（まあ、極度の人見知りなんで）」

「（でもあれ、ずっと見つめてたら石化する勢いだけじ…）」

「（咲かうああなんで、まあそのつひ澪も慣れますから。）

また澪ちゃんを見てみる。

俺の視線に気づくと、今度はティーカップを持ち上げたり、もとに戻したり、置いたティーカップの角度を調節してみたりと、なんか落ち着かない様子だ。

「ねえ、澪ちゃん。」

「まつ、まじつー。」

澪ちゃんは俺が声をかけると触っていたティーカップをガシヤつと鳴らす。

「こま、彼氏居る?」

「えつ…」

「ブウウツー ゲホゲボつ」

律ちゃんが、飲んでいた紅茶を豪快に吹き出す。
澪ちゃんの顔がまるまるつむに紅くなつていぐ。

「なつ、こつ、居ませんーー。」

やうにひて漆ちやんば、俯く。

「じゃあ、俺と付き合ってくれ。いや、結婚してやる」

「ええっ！？そ、そんな、会つて間もないのにむり無理ですか？」「

「みつ、澪、落ち着けって。」

紅くなりすぎていまにも爆発しそうな勢いの澪ちゃんを律ちゃんが
なだめる。

「でつ、でも律。プロポーズされ…」

「落ち着いて濶ちゃん、ハル君は女の子には軽率にこうこういふことはないよ。」

割りと本気なんだがと思つが口には出れない。

「ほら、澪。だから落ち着けって。」

「でつ、でも律。プロポーズされ……」

「それは、挨拶みたいなもんだってきつと。」

「で、でも律。プロポーズされ……」

「人の話を聞け。」

律ちゃんが呆れる。

美希さんは、面田さんに瀧川さんを眺めっこる。
そこで、綿ちゃんが後ろからさりげなくへる。

「お茶が入りましたよ~」

「おっあつがといつ。」

俺は綿ちゃんから、ティーカップを受け取り、一口飲んでみる。

「つまこ……」

「あつがといづらこます。」

「ひとこも美味しいお茶を飲んだことは、産まれてこのかた一度
もないっ。」

俺は神速で立ち上がり綿ちゃんに近づき、手を握る。

「結婚して下せ……」

「『』みんなさー。でも、気持ちだけ貰います。」

「ぐはっー。」

瞬殺だつた。

どつからり、わざわざの会話を聞いていたよつだ。

「ほひ、澪。だから大丈夫だつて。」

「でつ、でも律。プロポーズされ……」

「人の話を聞けええっ！」

「じゅあ、よろこべね。」

美希先輩が、櫻木先輩に声をかける。

「美希さん、また明日。」

「晴樹先輩お先です。」

律も声をかける。

ムギは、少し申し訳なさそうに頭を下げている。
何故ムギがそんな態度をとつたかといつと。

『もう下校時間ね。』

『ティーカップ片付けますね。』

『俺が片付けるんで、皆先に帰つていいですよ。』

『でも……』

『いって、ほら、下校時間過ぎるとあれだから。』

こんなことがあつたからだ。

私は、こっちを見てみる先輩に、軽く会釈する。
美希先輩が部室のドアをガチャリと閉める。

「じゃ、帰りましょーか。」

美希先輩が階段を下る。私達もそれに続く。

「なあ、澪一。」

「何だ？律。」

「もしかして、人見知り克服したのか？」

「えつ？ 何で？」

「だつて、晴樹先輩と初対面なのに結構喋ってたじやん。」

「あ。」

「そういえばそうだ、始めはいきなりあんな事言われたけど、その後は結構話せた。先輩は初対面なのに…」

「何でだろう。」

「まあ、いい人そудだし。馴染み易かつたんじゃないかな？」

「そつかな？」

ちょっと不思議な感じだな。あの先輩。
前を美希先輩とムギが歩っている。

廊下の窓から見える外は、きれいな夕日が見えて、まるで燃えている
ように空が紅く染まっていた。

第一話（後書き）

読んでくださった方々ありがとうございます。

「ん~……」

美希さんの盲点だったわ発言から一週間がたつた今日、俺は悩んでいた。

何故なら、今日はいつもより早い時間にバイトが入つていからだ。普段は学校が終わってからの時間なのがちよちよく早い時間に臨時にバイトが入ることがあるのだ。今は、バイトまで少しだけ時間があるので部室に来て美希さんと一年生の三人で馴染っているところだ。だがしかし、もう時間的にバイト先に向かわなければならない。携帯のディスプレイの時計を睨み付けながら悶々とする。もつと話してみたいがいかんせんバイトには行かなければならぬ。うーん。

「なんたるジレンマっ!..」

「なんすかにきなり……」

俺が叫ぶと律ちゃんがジト目で俺を見てくる。

「ハル君なんでいきなり叫び出すの?何か変よ。…あ、いつもそうだったわね。ごめんね。」

美希さんは叫んだことを特に気にしていない様子で「ひりを見てくれ。…何かひどくね！？」まるでいつも俺が叫んでるみたいな言いぐわじやないか！？。

「えつ、違つたかしら。」

「しけつと心を読んできましたね…はっ！これが以心伝心とこいつつかつ…ふつふつふつ…もうゴールインは近いようですね。さあ…美希さん結婚しま！」

「ハル君」

美希さんが笑ながら怒っている。ヤバい超怖いぜつ

「つか、なんでジレンマつて？」

律ちゃんが聞いてくる。

「よべぞ聞いてくれました。」

俺は少し溜めてから言い放つ。

「…残念ながら、俺は今からこの場を去らなければなりません。ううつ…」

「一人の反応を伺う…が

「あらそつ、じゃあね。」

「先輩さよならっす。」

「え！？なんか軽くあしらわれたよ！？ あれ、一人とも酷くないか
？」

てか、さつきから会話に参加してなかつた澪ちゃんと紬ちゃんにいたつては、二人で会話してこつちの会話を完全に聞いてないぜつ！無関心かつ！

「何か酷くねつ！ひき止めたりしてよつ！…せめて理由だけでも聞いて！」

「聞かなくもわかるわ。ハル君どうせバイトでしょ？遅れるから早く行つてらっしゃい。」

「なんでわかるんですかつ！」

美希さんは読心術の達人なんだろうか。

「早く行つてらうしゃい。」

「はーい。」

俺は、シットと敬礼して鞄を手に取り、部室を出る。

「先輩つて扱いやすい人すつね…」

「私はハル君のそういう所好きよ…」

「まじっすか…」

「いじめ甲斐があるから。」

「そゆ事すか…」

部室を出た俺は廊下を歩いていた。

窓から外の風景を見てみる。外では運動部が部活をしている。いやあー皆新入部員も入つて本格的に活動しますな

そういうや、うちの部活動してなくね！？いつも駄弁つてね！？このままじゃマズイなと思いながら、ふと前を見ると向こう側から女の子が歩いて来ているのが目についた。

その子は、周りをキヨロキヨロ見ながらふらふらと、いまにも転び

そうな歩き方で歩いてくる。

「こんな中途半端な時間に……」

今の時間に廊下を歩いているのはちょっと不自然だ。何故なら、放課後のこの時間は掃除も終わってから暫く経っているし、それに部活動をやっていない人は、ほとんどがすぐに家に帰る。逆に部活をやっている人の場合は部活にもう向かっているだろう。

それともう一つあるのが、この廊下の通りにある教室は文化系の部活が使っている教室がほとんどだ。文化系の部活は部室で活動するのでこの時間にこの廊下を歩いている人はほとんど見たことがない。

「のわっ

瞬間、俺の横まで来たところで女の子が躊躇いつらに倒れて来る。それを俺は受け止める。

「大丈夫か？」

「ありがとうございます。躊躇いつらえ、てへへ。」

女の子は俺から離れると頭をペロペロと下げながらまた歩き始めた。俺も歩き出す。てか何もないとソリソリと躊躇くか普通…まああんな歩き方だったらそりゃ転ぶわな。

何か心配なので振り返つてみる。

「あ…」

また躊躇ついた。辛うじて転びはしなかつたよつだ。

「ジジイ娘…」

思わずそんなことを呟いてしまった。
にしても、何処に向かつてんだろう？

「あ…、バイト、バイト…」

バイトまで時間がないので俺は急いでその場を後退した。

翌日の放課後、部屋に向むかうべく俺は階段を上つていた。

「ふんすい」

声がしたのでそちらを見てみると、踊り場の所から窓の外に向かってドヤ顔をかましている娘がいた。

よく見れば、昨日転んでいた『ドジッ娘』もとい脳内から検索した結果名前は平沢唯、がそこにには居た。

「あっ、昨日のつ……えっと……」

俺に気付いた唯ちゃんが「ひらりを見て言ひへ。

「ああ、俺、櫻木晴樹、よろしく。」

「私は平沢唯、よろしく。」

いや、知っているナビもと思つたが口には出さないといつ。

「「ひさんといひで向やつてんだ?」

「あっ、今から部活に行くといひなんだあー。」

「せうなのか……」

部活に入つてたんだな」の子…

いつたい何部なんだる。とか、もう部室行かないとな。一刻も早く
部室に行つて美少女達と戯れるぜーっ！

「俺も部活だから、じゃあ。」

俺は、ヒラヒラと手を振つて階段に足をかける。

「はー！、私も部室行かなくちや。」

そつまつて唯ちゃんも階段に足をかける。

…ん？何かこっちに着いてきてないか？あ、唯ちゃんも部室がこつ
ちにあるのか。そしたら音楽室…合唱部か何かか？吹奏楽部かも…
まあ、関係ないかと思いながら階段を上りきり部室のドアのノブに
手をかける。

一ガチャリ

一バタン

唯ちゃんがドアを閉める。閉めてくれてありがたいな…ん？

長椅子に鞄を置きいつもの定位置にむかう。唯ちゃんも鞄を置き俺
のに続く…ん？

「おー唯ー

「こひつしゃい唯ちゃん」「

「ひ、平沢さん…」んこひわ…」

一年生三人が唯ちゃんに反応する。…ん?

俺はいつも定位置に座る。唯ちゃんは空いている席に座る。…ん?

ーん? ちよちよちよー! 何故に軽音部に唯ちゃんが居るんだ! ?

何か三人とも何事もなく唯ちゃんと話してゐるな…

ガチャリ

部室の扉が開き美希さんが部室に入つてくる

「あら、ハル君と唯ちゃん来てたの。」

美希さんがいつも座つてゐる椅子に座る。
そして唯ちゃんと何か話している。
てか、なんで唯ちゃんがこの軽音部に居るのかがかなり謎だ。
えつ、なんで普通に会話をしてんだ…

あつ

何かわかつた気がするだつ! とこつてもまだ確信した訳じゃない。

「唯ちゃんは昨日も部室でてきたのか?」

紺ちゃんに聞いてみると

「はい、来ましたよ。」

確信に変わった。

俺は勢いよく椅子から立ち上がった。

「今から紺ちゃんには俺の考えた推理を聞いてもらいたいこと思います。」

なんだなんだと全員がこいつを見てくれる。

「唯ちゃんは、律ちゃん、澪ちゃん、紺ちゃん三人と友達で放課後お茶しないかとこう話になつて唯ちゃんは軽音部に来ているっ！」

俺は唯ちゃんが食べてまくっているお菓子たちを指差して言つ。

「向より唯ちゃんが飲んでいる紅茶と食べているお菓子たちが証拠だつ！」「？」

「」「」「まつ?」「」「」

えつ？

何か違つたようだ。

「と詰りの説でハル君の完全な勘違いよ。」

「なん……だと。」

俺はかなり勘違いをしていたようだ。

かつてな思い込みをしていた俺に美希さんがとても丁寧に説明してくれた内容を簡単に言うと唯ちゃんは軽音部に入部したらしく、唯ちゃんは何か楽器できるんだろうか？見た感じできなそうだと思っていたから唯ちゃんが入部するというのは完全に思考から除外していた。それがこの勘違いのはじまりだった。

「やついえば平沢さん」

「唯でいいよ」

「えつ」

「二セーわたしに漆がせひ漆元琴乃のじと漆元琴乃のじだ

「漆もんが誰ひどと話してこた。」
「おひさんは聴かしかじかへ話を聞かがながり話をきく。

「おひ、ひす」

「……おおおおおお」

何か誰ひどがごときめこつけたりしがちつた。

「漆ひさん一漆ひさん一俺てかのひとのアトリクシラヒサ
てくれつ一牆樹つて一。」

俺はチャンスとばかりに身を乗じ出す。

「二セーせこでこすずかしこであり。」

「漆へせせせせせせ」

「つへ、律まで……なん」

「わあ漆ひさん皿つだ。」

「ハル君あんまつ漆ひさんあじじダメよ。」

はつー美希さんがまた笑ながら怒つている。スゲー怖いっ！

「おひおおお……」

つか、唯ちゃんときめいたまんまだな…

また一人増えた軽音部はこれからだ。

…つってもまだなんも活動してないがなつ！

第三話（後書き）

まず一つ…

一、一話を読んでくださった方々こんなに遅くなってしまって申し訳ありませんでした。

次に…

この『軽音部の日常』はなんと第三話で終わりですっ！
ほんとは、もう一話めでだいぶ心が折れました。もうキツイと。
かなり長編の話を執筆している方達は神なのかも。

ふざけ話せこの辺にして。

一話目でブツツリ終わらせてしまつのは何だか自分で産み出したキャラ達が可愛そうだなと思ったのでとりあえず二話まではと思い三話で何か終わりっぽい形にして終わりにしました。…多分…何か言い訳っぽいかな。

最後にこの小説を最後まで読んでくれた皆さんありがとうございます。
した。

またいつかさよならひとつ…

また小説を執筆したときにはまた会えるかもしれないですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4284w/>

軽音部の日常

2011年12月30日23時45分発行